

伊勢湾流域圏を対象とした臨床環境学の実践 — 三重県櫛田川流域における 農業・農村を事例に —

名古屋大学 大学院環境学研究科	萩原 和
名古屋大学 大学院環境学研究科	平野 恭弘
名古屋大学 大学院環境学研究科	河村 則行
名古屋大学 大学院環境学研究科	田代 喬
金沢大学 人間社会研究域	富吉 満之
名古屋大学 大学院環境学研究科	永井 裕人
名古屋大学 大学院環境学研究科	加藤 博和
名古屋大学 大学院環境学研究科	清水 裕之
立命館アジア太平洋大学	山下 博美
名古屋大学 大学院環境学研究科	富田 啓介
名古屋大学 大学院環境学研究科	高野 雅夫
名古屋大学 大学院環境学研究科	千葉 啓広

Practice of clinical ecology that targets Ise Bay Watershed
- on agriculture and rural watershed
in Kushida River, Mie Prefecture -

Kazu HAGIHARA

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Yasuhiro HIRANO

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Noriyuki KAWAMURA

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Takashi TASHIRO

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Mitsuyuki TOMIYOSHI

College of Human and Social Sciences, Kanazawa University

Hiroto NAGAI

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Hirokazu KATO

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Hiroyuki SHIMIZU

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Hiromi YAMASHITA

College of Asia Pacific Studies, Ritsumeikan Asia Pacific University

Keisuke TOMITA

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Masao TAKANO

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Yoshihiro CHIBA

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Abstract:

Aimed at understanding the condition of agriculture and rural area at the Kushida river basin, professor and PhD students at Nagoya University visited the site and did several examination to discuss strategies for making sustainable region. In particular, this project advocates establishing an area for academic and local people to reach a shared vision for creating a sustainable region. This method proved to be very useful in reaching of objectives.

Keywords: *clinical approach, synthesis and generalization of related academic fields, environmental education*

著者連絡先 萩原 和

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 D2-1(510)

名古屋大学大学院環境学研究科 GCOE 研究室

E-mail: kazukyoto@gmail.com

1. はじめに

日本の農村、とりわけ中山間地域における限界集落化が深刻化する中で、「ルーラル・サステナビリティ」の観点から、農業・農村の持続発展を議論する動きが見られつつある¹⁾。しかしながら、各専門分野を結ぶ実践的アプローチは未だ確立しておらず、各専門分野の研究者が横断的テーマを設定する中でも個別的に対処しているのが現状である。

このような現状を踏まえ、環境学研究における分野横断的な博士人材活用の糸口を見出すため、名古屋大学では2010年度からグローバルCOEプログラム「地球学から基礎。臨床環境学への展開」(以下、GCOEとする)を基盤として「臨床環境学研修(On-site Research Training: ORT)」と呼ばれる教育プログラムを実施している。臨床環境学を実践していくにあたっては、加藤他(2012)²⁾が指摘するように、臨床環境学が掲げる2つの視点(地域の持続可能性の①「診断」、②「治療・処方」)を重視したカリキュラム運営がなされた。

本稿では伊勢湾流域圏に属する三重県橿田川流域で実施したORTの一つの実践例を紹介しながら、どのようなカリキュラムから、如何なる過程を得て、調査対象に切り込んでいったかを具体例を挙げて報告する。特に農業・農村を対象としたORTの実践が、臨床環境学の構築において如何なる意義を持ちうるのか提示したい。

2. ORTにおけるフィールドおよびテーマ選定

橿田川は三重県中央部の中央構造線沿いを西から東に流れ伊勢湾に注ぐ一級河川である。その流域は、松阪市および多気郡多気町である。松阪市は、西は台高山脈と高見山地を境に奈良県に接し、南は多気郡明和町に接している³⁾。一方、多気町は内陸の町であり、三重県最大の池である五桂池と柝ヶ池が知られている⁴⁾。2つの自治体とも気候は、おおむね東海型の気候区に属し、西部は寒暖の差がやや大きく内陸的な特性を持っている。年間平均気温は14℃~16℃で、降水量は平野部では1,500mm程度、山間部では2,000~2,500mm

とかなり多い。こうした条件から伊勢茶の一大生産地として知られている。同フィールドの選定理由は、上述の地域特性が一つの流域に存在すること、加えてこの研修について行政の全面的な支援・協力が得られたこと、の2点である。

ORTにおけるテーマ選定は、各専門分野に所属している博士課程後期課程の院生(留学生含む)が3-4名で分野横断型チームをつくり、自らの課題意識に基づいたテーマを選定した後に、①診断、②処方のプロセスを経験する。なお、橿田川流域を対象とした、2011、2012年度の臨床環境学研修において設定・実践された、農業・農村関係の研究課題は以下のとおりである。

<2011年度>

- (a) : 橿田川のアユの持続的利用に関する研究
- (b) : シカの利活用と流通に関する研究
- (c) : 茶畑で使われている化学肥料の可視化と
“松阪牛液肥”の提案

<2012年度>

- (d) : 伊勢茶の新たな挑戦—海外輸出の可能性

課題設定から調査、分析、とりまとめに至るまでの間に、異なるバックグラウンドを持つ分野横断型チームは議論が発散しまう局面も多々見られた。そのような試行錯誤の中で見出されてきた工夫としては、研究者だけでなく、地域住民にもわかりやすいキーワードの抽出(本報告では、これを「アイコン化」⁵⁾と呼称する)による問題構造の整理である。

例えば、(c)⁶⁾と(d)⁷⁾では、いずれも「お茶」がアイコンとして位置づけられる。つまり、この「アイコン化」とは「お茶」という農作物・製品を通じて垣間見える環境学の諸課題の可視化に他ならない。この際、当初段階での議論の収束は必ずしも必要なく、むしろ「お茶」というアイコンから考えられる事象をできるだけ多くブレインストーミングすることが重要となる。特に求められる視点は、そうした諸課題が、専門分野としてどこまで議論されてきたか、また科学的根拠を担保しうる客観的データが存在するのかを精査することにある。この際、必ずしも既往の専門分野を

切り口とする質の高い文献や情報は揃うとは限らない。また、当該分野から見た場合に、明らかに的が外れた課題設定がなされる、あるいは既に研究し尽くされた、言わば「自明の理に至った事実」を知らずに追いかけている場合もある。しかしながら、ORT としては、こうした専門分野では切り込まない諸課題についても光を当てることを重視する。なぜなら、一連のブレインストーミングを通じて、農業・農村地域に厳然とある「(仮説を含めた) 地域課題の因果関係」の可視化こそが、臨床環境学の醍醐味であり、大きな意義を有しているからである。一連のプロセスは、結果として、統合的な俯瞰力と客観的な記述力を養いながら、地域の持続可能性を「診断」、「処方」することとなる。

ただし、このような ORT の実践においては時間的制約が生じることもあらかじめ念頭に置く必要がある。こうした問題に対処するため、伊勢湾 ORT では、水質調査や地理学的調査、林業見学など教員が企画する個別実習の機会を設けた。これらにより、臨床環境学に関わる多様な研究課題と方法の存在とその重要性を意識づけるなどの工夫を施した。

3. 問題群を整理する際のアイコン化の意義

本報告では、農業・農村を対象とした ORT の実践例において、発散しがちな問題群に対峙する方法論として、各要素間に通じる「アイコン」の設定とそれに伴う整理プロセスを紹介した。前節でも示したとおり、ORT の実践にあつては、例えば「お茶」をアイコン化する中で、問題群の関係性を俯瞰し、専門分野に留まらない視点を養うことを意図した。

こうした一連のプロセスは、大学関係者のみならず、一般住民にとっての課題意識を地域全体として共有する際にも大きなメリットをもたらす。例えば、「アユの減少」という課題に切り込んだ (a)^{8) 9)} を事例に挙げると、そもそも、地域住民間の中では、「アユ」の減少理由が、ある種の経験則や噂の域を超えない状況で流布する状況にあった(例えば、釣りによる乱獲、取水、生活要素としての残留塩素の影響、砂防ダムの影響、伊勢湾台風後の護岸工事、カワウによる捕食など)。こうした事実は、科学的に証明することは困難な面があ

るものの、地域住民が「アユ」というアイコンを通して垣間見る生態系変化は紛れもない事実であり、「実感」である。こうした地域住民の「実感」に対する問題共有無くして、本当のアユ減少という環境問題に肉薄することはできない。問題群の可視化とそれを象徴させるアイコンの設定は、専門家の単なる科学的分析・考察のみならず、地域住民が有する自然環境の経験的・感覚的知覚を、専門家が感じ取りながら俯瞰することの一步と位置付けられる。

このように、問題群を整理する際のアイコン化は、臨床環境学の実践において有効な課題整理の方法論であり、同時に異分野協働による専門家の融合の場を提供する可能性を秘めている。特に、農業・農村のフィールドは、多様に問題群が存在しているが故に、インターディシプリナリーなアプローチを喚起しやすい研究対象と言える。

補注

伊勢湾 ORT では、農村に限定せず、都市的な諸課題も研究対象に含まれている。しかしながら、本論では農業・農村を対象を絞ったため、下記のテーマについては議論しなかった。

<2011 年度>

クリスタルタウンの開発の住まい方の持続可能性

<2012 年度>

松阪商人の心に灯をともし賑わいある中心市街のあり方を探る

引用文献

- 1) 萩原和 (2010) : 研究動向 農村・地域計画 ルーラル・サスティナビリティの視点にもとづく新たな計画論の展開, 農業と経済, 76(10), 108-111.
- 2) 加藤博和・清水裕之・河村則行他 (2012) : ORT (On-site Research Training) を通じた基礎・臨床環境学創生への展望, 日本環境共生学会 2012 年度学術大会論文集, 100-105.
- 3) 松阪市ホームページ : <http://www.city.matsusaka.mie.jp/> (2013/8/02 参照)
- 4) 多気町ホームページ : <http://www.town.taki.mie.jp/> (2013/8/02 参照)
- 5) 佐藤 哲 (2008) : 環境アイコンとしての野生生物と地域

社会-アイコン化のプロセスと生態系サービスに関する科学の役割-, 環境社会学研究 (14), 70-85.

- 6) 青山ちひろ・永井裕人・Sharifi Ayyoob (2012): 茶畑での“松阪牛液肥”利用で変わる榊田川流域の環境. 榊田川 ORT 報告書 2011 年度臨床環境学研修 (伊勢湾 ORT) 30-48.
- 7) 陳淑珮他 (2013): 伊勢茶の新たな挑戦-海外輸出の可能性- 榊田川 ORT 報告書 2012 年度臨床環境学研修 (伊勢湾 ORT) 25-49.
- 8) 陳淑珮・林正能・藤井英紀 (2012): 榊田川の鮎の持続的利用に関する研究. 榊田川 ORT 報告書 2011 年度臨床環境学研修 (伊勢湾 ORT) 5-10.
- 9) 田代喬 (2012): 榊田川流域の水・物質. 榊田川 ORT 報告書 2011 年度臨床環境学研修 (伊勢湾 ORT) 176-179.